

記念館だより

Museum Wadatsuminokoe Newsletter

No. 16
2022.5.31

戦没学生の文章で“平和を訴える” わだつみのこえ記念館の特色

館長 岡田裕之

わだつみのこえ記念館は今年で開館以来十六年目を迎える。記念館の設立は母体である日本戦没学生記念会（通称わだつみ会）発足の一九五〇年に定めた、記念事業の一つであった。

記念会は「学徒出陣五〇周年」を刻して一九九三年、学芸への志を絶たれて戦死した学徒兵の記録を後世に伝えるべく、改めて記念館の設立を会内外に訴えた。こうして二〇〇六年十二月一日（不戦の集い）、現在に記念館を開館した。記念館は“戦没学生の悲劇を繰り返さない”とした記念会の平和行動と記念事業の結晶である。

本年、冷戦後長らく保たれてきた平和な国際秩序は、核大国で国連安全保障理事会の拒否権を持つ五大国の一員であるロシアが、自国の安全保障の範囲を近隣国に広げ、突如「生命線」を設け、独立国中国へ攻め込んだ歴史を思い起こさせる。結果は明らかである。平和を保つために、

第二次世界大戦、満州事変以来のアジア太平洋戦争の記憶を忘れてはならない。

わだつみのこえ記念館の名称は、一九四九年刊行の日本戦没学生の手記『きげ わだつみのこえ』（以下『こえ』と略称）に由来する。同書は「原版」であり「初版」であるが、同手記の刊行を記念して発足した日本戦没学生記念会は一九六三年、『戦没学生の遺書による15年戦争』を編集刊行した。後書きは上巻を『こえ』とする下巻として光文社から刊行されたが、一九八八年、岩波文庫への編入にあたり、先に編入された『こえ』に続く『第二集・こえ』となる。こうして『原版』は『こえ・第一集』となつて『第一集』『第二集』とも岩波文庫版となり、日本思想の古典の位置を定める。現在は、一九九五年に『第一集』、二〇〇三年に『第二集』がそれぞれ「新版」となり、岩波文庫版で普及している。

『こえ』はアメリカ占領下に日本に内在した「平和の訴え」を記録した。『第一集』は、1. 中日戦争期の中兵侵略の実態、2. 中国で戦う日本兵の空虚と中国兵の真剣さの対比、3. 恋人や家族への個人愛と祖国愛の狭間で敗勢の中で戦死する意味を記している。『第一集』も手記は、日中戦争期－太平洋戦争期－敗戦後期の時期構成で歴史的に構成されていた。

学徒兵は勤労青年と比べると、在学中には微兵猶予があり、入隊後も

親孝行の人間性と国家の求める自分の戦死の葛藤 苦惱 3. 人類の普遍性・共通性と「優秀な日本精神」なるものの独善、を記している。

『第二集』も「平和の訴え」を基調にするが、一九六〇年代初、主権を回復して国際社会に復帰した日本は、中国・韓国・朝鮮・東南アジア諸国と直面する。そこで記念会は、先の戦争を一九三一年の満州事変から始まる「十五年戦争」と認識する。

“わだつみの悲劇を繰り返すな”的綱領は戦争被害を強調するだけで良いのか、日本人の戦死、戦傷、戦災の以前に、先の戦争は東アジア侵略から始まつた。『第二集』は「アジア侵略の反省」を主題に新しい遺稿を軸にし、これに戦争直後の紙不足から割愛した『第一集』の遺稿を加えて、編集された。

記念館は、文章・コトバで伝える遺稿の展示と解説を行う平和施設である。記念館は『こえ』採録の一二人の思想内容である。わだつみのこえ記念館は、文章・コトバで伝える遺稿のかな文章を遺した。ここで重要なのは、戦没学生の戦争への疑惑・批判、は、戦没学生の戦争への疑惑・批判、の思想内容である。わだつみのこえ記念館は、文章・コトバで伝える遺稿の展示と解説を行う平和施設である。

記念館は『こえ』採録の一二人の遺稿をベースにしつつ、採録者以外の戦没学生遺稿を積極的に収集し、外の戦没学生遺稿を積極的に収集し（十九名）、朝鮮人戦没学徒兵の史料を展示している。

また、遺稿の展示、内容の解説に物・複写とも収集しており、記念館2Fにその一部が常設ガラスケース内に説明、展示されている（スペースの都合で時宜に展示替えを行つて）。

『こえ』はこれらの中でも貴重な遺稿を原稿の寄託を得た。『こえ』に採録された文章のうち散逸したものは残念ながら非常に多いが、遺族にとつては保有する遺稿は「貴重な記録遺産」であり、宝物である。記念館はその者は遺族であるし、寄託先の希望もある。そこで原本は手許に、「複写（フォトコピー）」を記念館に、といふケースも出てくる。記念館はこの新しく収集し寄託を受けた遺稿から、戦後八〇年にふさわしい新しい『戦没学生遺稿集』を編むことが出来たらと願つていて。



撮影／斎藤 尚義

入館案内		開館日
時 間	料 球	(祝日・夏季・冬季休館あり)
午後一時～四時	無料	* 団体の場合は別途考えますので曜日・時間等ご相談ください。
※エレベーターもあります。	※ 資料閲覧・映像の視聴は事前にご連絡ください。	
日・時間等ご相談ください。	※ アクセス 地下鉄丸の内線・大江戸線「本郷三丁目」下車七分	

映画『きけわだつみの声』（新旧作品）を視聴できる。「こえ」各版および英独仏語訳各版も展示してある。なお、階段上の壁にある戦没学生の遺影を背に、本郷新制作の『わだつみ像』（彫塑（一九五〇年・原型エスキース複製）が設置されている。彫像は抵抗の左手を挙げようと試みるが成らず、空しく戦死した悲哀を右手に向かた伏目の顔で表現する。この彫像は開館十周年を記念して募金により建立された。

さらに、1Fに参考図書の書庫があり、研究者による利用の便宜をはかっている。また、未公開であるが七〇年間のわだつみ会史の史料があり、すでに研究論文作成に使用されている。わだつみのこえ記念館は、古典『こえ』に基づくわだつみ会の運動、運動から生まれたNPO記念館法人の記念施設でもある。

『こえ』はともに応募稿による編集で遺稿原本の収集による編集著作で、遺稿原本との照合は完全ではない。幸い、本記念館は、多くの遺族のご厚意により貴重な遺稿の寄託を得た。『こえ』に採録された文章のうち散逸したものは残念ながら非常によいが、遺族にとつては『こえ第二集』も遺稿原文との照合は全くではない。幸い、本記念館は、『こえ第一集』と二〇〇三年『新版・こえ第一集』と二〇〇三年『新版・こえ第二集』も遺稿原文との照合は全くではない。幸い、本記念館は、多くの遺族のご厚意により貴重な遺稿の寄託を得た。『こえ』に採録された文章のうち散逸したものは残念ながら非常に多いが、遺族にとつては

「学徒出陣の証言」の編集について

茂木 尚

私の伯父茂木忠は昭和二十年五月

(慶大)と思いまして夫々である。

十一日、零戦五二型に五百キロ爆弾

を搭載して鹿児島県鹿屋基地を出撃

し特攻戦死を遂げた。享年二十三歳。

昭和十八年十二月十日学徒出陣で海

軍に入団し飛行訓練を開始したのは

十九年六月、僅か一年未満の訓練で

特攻戦死したことになる。当初は伯

父の戦死に至る迄の足跡を辿るつも

りだったが、同期の海軍第十四期予

備学生の方々にお会いして多くの写

真や資料を頂くうちに、これらを時

系列に整理し記録として残すべきと

の思いに至つた。それがこの「学徒

出陣の証言」である。以下、順を追

つて一部を紹介する。

学徒出陣とは昭和十八年十月二

日公布的勅令第七五五号「在学徵兵

延期臨時特例」により学生に対する

徴兵猶予を停止され、十月二十五日

から十一月五日の間に実施の臨時徵

兵検査に合格した者を十二月一日陸

軍に入営、十二月十日海軍に入団さ

せたことをいう」(高松信夫(神商

大))。徴兵猶予を停止された時は、

「悲壯も興奮もない。若さと情

熱を潜め己の姿を見つめ、古の若武

者が香を焚き出陣したように、心静

かに行きたい。征く者の気持ちは皆

「當時の世界情勢からいって、遅かれ

早かれアメリカとは戦わなければな

らない状況だった」(阿山剛男(早

大))、「悲壯も興奮もない。若さと情

熱を潜め己の姿を見つめ、古の若武

者が香を焚き出陣したように、心静

かに行きたい。征く者の気持ちは皆

「青天の霹靂」とはこの事だ。私は慶応

大学本科二年に進級したばかり。卒

業後に行くと思つていた」「三上英満

がいた。「武山(横須賀)は海軍士官としてやつていく能力と体力があるかを見極める所」「佐藤孝一(専大)は約三千五百名だつた。土浦の基礎教程は「士官としての宮外競技場の出陣学徒壮行会には七十七校、行進用の三八銃が不足で各校百名程度が参加した。「マスコミは大学生のことを「サボ学生」と言つていたのに、急に学徒とか若鷺とか言いだして『おだてるな』と反発して参加はしなかつた」「佐竹一郎(東大)」。

徴兵検査では海軍か陸軍かの希望調査があつたが、海軍のスマートさ、飛行機の操縦に憧れた者も多く、「学校の教練で、幹候上がりの教練教員の無教養、粗暴が嫌でたまらなかつた」(長澤剛正(慶大))、「陸軍の形式主義が嫌いであつた。軍人勅諭の棒暗記、人間より大切だというお馬様の相手、憲兵を含めてあの必要以上の威張り方も我慢できなかつた」(平野仁右衛門(早大))等の理由で海軍を選んだ学生もいた。出身地により横須賀、舞鶴、呉、佐世保の4海兵団に入団した。

中間練習機教程は一九年六月に始まり、操縦は赤トンボによる離着陸飛行から編隊飛行、特殊飛行へと進み、偵察は白菊、九〇機上練習機による通信、気象、電探、航法、爆撃等の訓練を行つた。九月末に操縦は戦闘機、艦上攻撃機、艦上爆撃機、一式陸攻に分かれ、偵察は大井、徳島で実用機訓練に入つた。術科教程を終えた要務は「直ちに第一線の実戦部隊に転出、多くの者がフリーピン、シンガポール、硫黄島等過酷な戦闘状態にある南方」(長澤剛正(慶大))に配属され、早くも十月に

の一月まで飛行訓練がなかつた」「手塚久四(東大)」。他の航空隊も同じ状況の中、十二月二十五日少尉に任官した。昭和二十年二月戦局の急速な悪化により各航空隊で特攻の希望調査があつたが、拒否ができる状況になってしまったが、希望に○を付けた。俺達が特攻で死ねば本当に平和になれるのかどうか悩んだ。この戦争は正義の為のものではない。東洋

平和、俺はそんなことの為に死ぬのではない。人間として、与えられた任務を全うすることが美しい生き方だ。俺はそこに死ぬ道をみつけた」「佐々木八郎(東大)」と己の死の意義を問い合わせ、「安田弘道(慶大)は戦争とか特攻とかは全く無縁の男、最後までフランス語の辞書と首つ引きで勉強していた」「小針文秀(拓大)」と出撃直前まで学生の本分を全うする中、四月六日開始の菊水作戦で五百九名の十四期予備学生が特攻戦死した。

二十年一月米軍がフィリピンのリンガエンに上陸し、在比各航空隊はクラーク地区ピナツボ山麓に陣地を築いたが、「もともと海軍には陸戦で使用する火器類は少なく、拳銃や軍刀で戦うしかなかつたが、戦死者の大半はマラリア等の伝染病と食糧不足による餓死だつた。ここで飢え死んだ者もいた」「寺尾哲男(早大)」。十一名がフィリピンで戦死した。各航空隊は本土決戦の準備をしたが、「十五日の玉音放送は整列して聞きました。ジリジリと真夏の太陽が照りつけて暑く、何を言つてゐるかわかりませんでしたが、だいたい終

私の伯父茂木忠は昭和二十年五月十一日、零戦五二型に五百キロ爆弾を搭載して鹿児島県鹿屋基地を出撃し特攻戦死を遂げた。享年二十三歳。昭和十八年十二月十日学徒出陣で海軍に入団し飛行訓練を開始したのは十九年六月、僅か一年未満の訓練で特攻戦死したことになる。当初は伯父の戦死に至る迄の足跡を辿るつもりだったが、同期の海軍第十四期予備学生の方々にお会いして多くの写真や資料を頂くうちに、これらを時系列に整理し記録として残すべきとの思いに至つた。それがこの「学徒出陣の証言」である。以下、順を追つて一部を紹介する。

学徒出陣とは昭和十八年十月二日公布的勅令第七五五号「在学徵兵延期臨時特例」により学生に対する延滞臨時特例」により学生に対する徴兵猶予を停止され、十月二十五日から十一月五日の間に実施の臨時徵兵検査に合格した者を十二月一日陸軍に入営、十二月十日海軍に入団させたことをいう」(高松信夫(神商大))。徴兵猶予を停止された時は、「悲壯も興奮もない。若さと情熱を潜め己の姿を見つめ、古の若武者が香を焚き出陣したように、心静かに行きたい。征く者の気持ちは皆そうである」(市島保男(早大))、「青天の霹靂」とはこの事だ。私は慶応大学本科二年に進級したばかり。卒業後に行くと思つていた」「三上英満

がいた。「武山(横須賀)は海軍士官としてやつていく能力と体力があるかを見極める所」「佐藤孝一(専大)は約三千五百名だつた。土浦の基礎教程は「士官としての宮外競技場の出陣学徒壮行会には七十七校、行進用の三八銃が不足で各校百名程度が参加した。「マスコミは大学生のことを「サボ学生」と言つていたのに、急に学徒とか若鷺とか言いだして『おだてるな』と反発して参加はしなかつた」「佐竹一郎(東大)」。

徴兵検査では海軍か陸軍かの希望調査があつたが、海軍のスマートさ、飛行機の操縦に憧れた者も多く、「学校の教練で、幹候上がりの教練教員の無教養、粗暴が嫌でたまらなかつた」(長澤剛正(慶大))、「陸軍の形式主義が嫌いであつた。軍人勅諭の棒暗記、人間より大切だというお馬様の相手、憲兵を含めてあの必要以上の威張り方も我慢できなかつた」(平野仁右衛門(早大))等の理由で海軍を選んだ学生もいた。出身地により横須賀、舞鶴、呉、佐世保の4海兵団に入団した。



茂木尚編『学徒出陣の証言』

な黙り込んでしまつて何も話しませんでしたが、リーダーは泣いていました。敗戦はなんとなく感じていましたが、時間が経つにつれショックがじわじわと広がってきて、気持ちはやり場がありませんでした」「杉溪一言(東大)」。厚木基地で「帝国海軍は降伏せず」と徹底抗戦の騒動があつたがすぐに沈黙化した。「戦犯裁判があるから記録類は全て焼却 廃棄せよ」「川井正(法大)」との命令で、残された記録が少なくなりました。敗戦した戦友は大きなくじけた。俺はそこに死ぬ道をみつけた」「佐々木八郎(東大)」と己の死の意で笑いました。「柳井和臣(慶大)」。操縦は北浦、谷田部、豊橋、出水等へ、偵察は大井、徳島へ、鹿児島の要務は土浦、滋賀、詫間、青島等全国各地に配属され実践訓練へと進んでいた。

中間練習機教程は一九年六月に始まり、操縦は赤トンボによる離着陸飛行から編隊飛行、特殊飛行へと進み、偵察は白菊、九〇機上練習機による通信、気象、電探、航法、爆撃等の訓練を行つた。九月末に操縦は戦闘機、艦上攻撃機、艦上爆撃機、一式陸攻に分かれ、偵察は大井、徳島で実用機訓練に入つた。術科教程を終えた要務は「直ちに第一線の実戦部隊に転出、多くの者がフリーピン、シンガポール、硫黄島等過酷な戦闘状態にある南方」(長澤剛正(慶大))に配属され、早くも十月に

常設展をみて

みんな若くして亡くなり、とても悲しい気持です。二度と戦争のないように祈ります。今の幸せの生活を大切にします。

(2021.5.15 板橋区 28歳 中国人)



はじめて訪れました。今、日本に戦争がないことがあたりまえではないということを痛感しました。私と年齢がほとんど変わらない学徒兵たちが、死ぬ意味、生きる意味を模索する様子が資料や手紙からひしひしと伝わり、胸がつきました。今の生活に感謝をし明日からも丁寧に生きようと思います。

(2021.7.5)



授業の関連で訪れました。戦争に行って死ぬことが国のかなではくつがえすことのできないものになっていて、個々人は抗えなく、戦死に対していろいろ苦悩していましたが、実際その人たちが書いたものから伝わってきて、戦争はなんのためにやっているのだろうとか、今後戦争をしてほしくないという思いになりました。薄っぺらい感想しか書けないけれど、今後二度とこんな戦争がされないために自分たちができることは何かないのだろうかと考えるようになりました。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。

(2021.7.5)



はじめて来ました。前からこようと思ったけど、コロナでなかなか来られなかつたが来れてよかったです。若い学生たち、朝鮮の人たちも含めて、お国のためにだとまだされ特攻隊や戦場に行かされてひどいと思った。また政府が憲法を改正しようとしている。絶対憲法改正には反対！ 再び若い人たちを戦争にまきこもうとしている。戦争反対だ。若い人たちを戦争にまきこむな！

(2021.10.11)



『きけ わだつみのこえ』を20年前に読み、亡くなった方のためにも、一生懸命日本や世界のために学問しようと思いました。それができているかわかりませんが、今後も学問をずっと続け、後世のために自分がやれることをやっていきたいです。亡くなった方々の学問に対する強い思いに微力ながら応えるためにも。

(2021.10.27 御殿場市 40代 会社員)



数年前から「一度行ってみたい」と思っておりました。ここに展示されている戦死者の方々は、全戦死者のごく一部。しかしもし戦死しておられなければ、日本の未来を背負っていかれるような優秀な方々だったはず。若くして亡くなられたことが何とも悲しいです。

私の父は大正15年生まれ。終戦の時は海

来館者の「感想ノート」より

軍兵学校で訓練中でした。戦争があと少し長ければ、父はきっと戦死したでしょう。私もこの世に存在していませんでした。

自由と平和を熱望しつつ戦死された方々の思いを今、日本の生きる私たちはかなえているでしょうか。彼らの死を無駄にせず生きていかねば、と思います。



前途ある若者たちが戦争の犠牲になったことに胸が痛みます。彼らの靈のためにも平和を希求する精神を持ち続けたいと思っております。どうか安らかにお眠りください。

(2021.11.8)



通るたびに気になっていました。平日の今日やっとこられました。私の曾祖父も戦争で亡くなりました。どんな思いだったろうと思いました。

(2021.11.26)



お国のために死ぬことがよろこばしいこととされていた時代ですが、彼らの父母は本当は何を思っていたのか知りたいと思う時があります。今回直筆の遺品、手紙と映像を見てこれらの物には本人の思いだけでなく、それを受けとった家族の思いも含まれているのだと思います。自分と同年代の人たちが戦争で亡くなっていて、彼らの人生がいかに短いものであったのかわかります。日本の将来の発展に携わる予定であった若者が戦争で死ぬのはやるせないですし、今後もあってはならないことだと思います。

(2021.12.6 20代 女性)



以前から訪れたいと思ってました。今日やっと主人と参りました。お国のために若い優秀な青年たちが命をかけて戦ってください今のは平和な日本があります。それを忘れずにずっと生きていきたいです。今週、山口県の回天記念館へ行くので更に思いを深めたいと思います。英霊たちに感謝して精進したいと思います。今後もこのような戦争を知ることができる所があり続けて欲しいです。

(2021.12.11)



いつも通りから「わだつみのこえ」の看板をみていてとても気になっていました。子どものころ叔父の戦地から父母にあてた手紙を思い出しました。今日か明日か、いつ死ぬかも知れない戦地から父母の健康だけを願った言葉がつづられていました。とても丁寧な文字、父母を敬った言葉づかいがとても印象的でした。たくさんの優秀な若い方の心情や願いが痛いほど伝わります。当時の家族のお気持ちはどんなにか苦しかっただろうと思います。

全体主義という言葉が心に残りました。

個人の幸福があってこそ社会であってほしいです。

(2022.1.12)



自分とほとんど年齢の変わらない学生たちが、死ぬ意味や戦う意味を見いだそうとしている様子や、彼らの「生きたい」という強い欲求が手記から溢れていて、心が痛みました。

特に印象に残ったのは、奥さんと子どもに向けて書かれていた手紙です。奥さんの名前を何度も何度も繰り返し書いていて、愛する人と一緒に過ごしたい、けれども戦いに赴かなければならない、という葛藤が滲み出していました。また、手紙を受け取った方々の心情を推し量り、考えてしまいました。残された人々もやりきれない気持でいっぱいだっただろうと思います。(大学生)



戦争が何を奪ったか、それを語り伝える手段は漫画・ドラマ・映画とたくさんあります。自身の体験は漫画「はだしのゲン」ですし、森山良子の「さとうきび畑の唄」も、丸木位里・俊「原爆の図」など、直接多くの人に訴えかける力を持つのは、こうした様々な表現、広い意味でのアートだと思いますが、その発想源として必要となるのが、わだつみのこえ記念館が保存して守り伝えるような一次資料だと思います。

(大学生)



戦没学生の思いが激しく表れている手紙はもちろん、兄弟の勉強の様子を聞いたり食料事情を心配している手紙が印象的だった。そういった現在でも日常的に話題とするようなことが、戦争中で死が身近な前線の学生の話題になっていたということによって、これまでより戦時中の話が自分に近づいたように感じた。

(大学生)



「来館者感想ノート」には「前途ある優秀な青年」「こんな若くて」といった言葉がこれでもかと費やされていた。しかし「若くなればいいのか」。優秀でなかったらいいのか。こう問われて「もちろんそんなことはない」と彼らは言うだろう。だが、本展示をみた人びとが「感想」として無意識にそう書いてしまうことが、どれだけこの展示によって反省を迫られるべき類の無意識なのかということについて、こうして字數を割いておいてもよいだろう。



時代が変化しても、当時の一次的な資料へのアクセスが可能ならば、我々はいつでも原点に立ち返ることができる。戦没学生本人の記したもの博物館が保存し、一般に公開してくれることで、完全に当時の感覚を理解することは不可能だとしても、少なくとも戦争当時の当人の思いや状況を本人たちの言葉で知ることのできるありがたさを身に沁みて感じた。

(大学生)

